



ルー
テル

藤が丘だより

発行 月報委員会

発行日 2022年4月3日

No. 95

罪と何のかかわりもない方を、
神はわたしたちのために罪となさいました。
わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。
コリントの信徒への手紙二 5章21節



礼拝献花より

御言葉に生きる

実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。
ローマの信徒への手紙 10章17節

ルター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会 牧師 佐藤和宏
〒227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: fujigaoka@jelc.or.jp



シリーズ説教

『走り寄る神』

牧師 佐藤和宏

ルカ15章1〜3、11b〜32節

『放蕩息子のたとえ』の中で、父親は喜び、祝宴をあげる理由を、次のように言い表しています。「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。」しかも、たとえの中で2回繰り返されていることから、父親の口を通して、主イエスが特に告げたいことであると、想像できます。

同じような表現が繰り返される場合、二度目に強調点が置かれるものです。ですから、私たちの常識的な理解で言い表すなら、「いなくなっていたのに見つかり、死んでいたのに生き返った」と言った方が、ふさわしいと言えるでしょう。「死」よりも否定的な状態はなく、つまり「いなくなる」と「見つかる」ことをさらに囲い込むなら、それは「生きる」と「死ぬ」ことにほかならないと思われのです。それが私たちの人生全体と言えるからです。ところが、

が、このたとえが示しているのは、「死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」ということなのです。「死んでいたのに生き返り」という、私たちの人生がすべてなのではなく、それを丸ごと囲い込む命があるということにほかなりません。それが「いなくなっていたのに見つかる」という神の御業であり、そこに命を超えた喜びがあるとされているのです。つまり、一度目の「死んでいた」より、二度目の「いなくなっていた」の方が、より絶望的な状況なのであり、「生き返る」ことより、二度目の「見つかった」ことの方が、より命溢れる喜びなのだ、と主イエスはこのたとえを通して言われているのです。ここに私たちの思いを高く超えた、神の御心を知らされます。

「見いだされた羊」であり、「見つかった銀貨」のたとえと呼ばれる方が、よりふさわしいのです。「いなくなっていたのに見つかった」、ここに主題があるのであり、喜びがあるからです。そうなりますと、今日語られたたとえは「放蕩息子のたとえ」というように、弟息子が主役なのではなく、見だし、走り寄って、祝宴を開く、父親こそ主役であると思われるのです。

私たちは日々の生活の中で、見失われた一人ひとりにほかなりません。なぜなら「死んでいたのに生き返り」という命が最も大切であると生きてしまうからです。そのような命の中で、私たちは死に囚われて生きているということなのです。しかし今日告げられているのは、「死んでいたのに生き返り」という、私たちにとって常識的にみえる命を囲い込む「いなくなっていたのに見つかった」という命があるということなのです。

この私を探し求める方がおられ、私たちが戻って来るのを見いだすと、決してふさわしい私たちではないにもかかわらず、まだ遠く離れていたとしても走り寄って、抱きしめてくださるのです。

毎週の礼拝の場は、そのような場所、時間なのではないでしょうか。礼拝をサービスと言います。それは、私たちが神を礼拝するのではなく、神が私たちに奉仕してくださるということなのです。

放蕩息子が「我に返った」時、悔い改めが完成したのではなく、父親がその息子を見つけ、走り寄って抱きしめた時、真の悔い改めに至ったのでした。同じように、毎週の礼拝の場で、神に迎え入れられて、私たちの悔い改めは完成するのです。礼拝の初めに「罪の告白」が設定されていますが、私たちが悔い改め、罪を告白するから赦しが実現するということではありません。日々の生活の場から、死に囚われた命の場から礼拝の場に帰ってくる、私たちが「まだ遠く離れているのに」見いだして喜ぶ神に迎えられて、赦しは先行して実現しているのです。このように悔い改めを繰り返しながら、私たちは絶えず主と共に生き、喜びの祝宴にあずかり、主と共にすべての人々に仕える群れとして、用いられるのです。(四旬節第4主日)

●江〇〇子さんより

コロナ禍の毎日、お出かけ大好きな私は外出制限の中、いかに元気に過ごそうかを考えました。そう、愛犬二匹との散歩を楽しもうと。春夏秋冬を感じ、木々や花達の成長の速さの驚き、久し振りの犬友達とのマスクごしの会話が元気の源です。

今年インターネットと仲良



しになり、アナログ人間からの脱却と赤毛のアンシリーズの全巻読破が私の目標です。勿論老眼鏡をかけながら…。

そして今年一年間、役員として皆様と共に佐藤先生と共に信徒の皆様と手を取りあつて教会を支え、心が

ほっとする居場所である教会になつたらと思います。

主日礼拝ライブ配信の回想録

ー心地よさを目指してー

田〇〇夫

そこで、環境整備の機材リストとして①Newパソコン ②ビデオカメラ ③キャプチャー(ビデオ映像をデジタル変換する機械) ④コード類 ⑤マイク の5品目を揃える必要があるとした計画を立てました。リストとして上げた機材の

パンフレットを再確認しつつ「これでよし。いやいや、これでいいのか？」などと自問自答しながら機器の値段を合計してみると予想以上の高額となり、教会の台所事情を思うと「このままストレートに提案しては、印象が悪いかな…」などと忖度をし、役員会にはパソコンとキャプチャーを教会備品として購入をしてもらうこととし、その他のビデオカメラ・マイク・コード類(USB-Aハ

ブ等)などは、家で使わなくなって眠っている機器を献品することで揃えることとしたのです。

*その後、配信の度に不安定だったWi-Fiの機材も献品し安定したWi-Fi環境へと改善が図られました。

こうして機器類が整えられ「これでよし!問題解決!」と気持ちを新たにライブ配信に挑んだのですが、残念ながら思い描いたようには進まず、むしろ逆に以前とは比べものにならないほどの質の高い新たな問題が生み出される結果となってしまう、簡単にクリアーできるだろうと思っていた音声問題が、パソコン・映像機器・音声集録機器・配信用ソフト・Wi-Fi環境 が複雑に干渉しあい絡み合つて私たちの前に対峙してきたのです。それは、礼拝全体を通しての音声と音色の質と量の問題と、もう一点は物理的な騒音と電氣的な複数の雑音の混入という問題として現れました。つまり、オルガンの音量が大きく収録されて讚美歌を歌う皆さんの声が消されてしまうという現象と、聖書朗読の声・先生の司式の声と説教の声とのバランスが悪く、尚且つその音声に電氣的な

雑音が常に加わった状態となつてとても聴きづらい音声となつていたのです。「何でそうなるの」と奥歯を噛み締めつつ、すぐには解決できない多くの課題と問題に頭が痛くなり、ちよつぱり途方にくれる事となりました。

その後、感染拡大(2020年春)とグループ分け礼拝の継続が相まつて信徒の皆さんの間でライブ配信に対する関心度が急速に高まり、それに相応するかたちで「視聴したい」と希望される方々が増えてゆきました。そして、受信の方法についてのご質問も多数受けるようになり、皆さんの必死な眼差しから発せられる言葉のトーンをお聞きするたびに、「早く何とかしなくては」との焦りと同時に背筋をピント伸ばした事を昨日の事のように覚えていきます。

(続く)



来年宣教40年を迎えます。

1983年11月27日、待降節第1主日に、藤が丘教会最初の礼拝が執り行われました。ですから、2023年11月に、宣教40年を迎えることとなります。

前任牧師の小副川先生は次のように書いています。「(1978年の)城南神奈川地区会で、『新しいヴィジョンを建てよう』という宣教課題が掲げられ・・・開拓伝道の計画が起ったのです。」(『藤が丘教会の足跡』)

今月の受洗記念日の皆さん

1日 菊〇美子姉 6日 野〇江姉、〇瀬〇恵姉、〇山直〇兄
7日 〇〇ダン〇梨姉 8日 〇岡〇人兄 10日 〇田〇子姉、小
〇〇子姉 11日 〇野〇治先生、〇林〇実姉、山〇〇司兄、井〇姉
〇林〇和兄 12日 〇野〇子姉、〇野〇兄 14日 〇田〇兄、田〇
〇子姉、〇山〇姉、〇木〇子姉、〇藤真〇姉 15日 〇野〇佳子姉
上〇〇秀兄、〇橋〇葉姉、〇山〇一兄 20日 秋〇ゆり〇姉 21日
〇井〇子姉 22日 〇山〇〇〇み姉 23日 〇井〇姉

おめでとうございます。

「実に、信仰は働くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。」ローマの信徒への手紙 10章 17節
藤が丘教会ウェブサイト <https://www.jp-4jgk.com/>
フェイスブックで礼拝のライブ中継をしています。(毎日曜17時30分)

0から出発した計画は、5年の歳月を経て、実現するに至ったのですが、そこには地区、教区、そしてアメリカの教会の皆さんのお祈りと献金があったことを忘れるわけにはいかないでしょう。ある教会はこの計画のために借金をし、ある教会は自分の建築計画を先送りにする事で、この計画に祈りを合わせてくださいました。それぞれが痛みをもつて、それが藤が丘教会となつていったのです。私たちはこのことを、決して忘れることはできません。私を含めて、この数年の間に来ら

れた方にとって、40年前の出来事は遠い昔のことと思われるでしょう。

しかし今、私たちが集まるのは、たくさんの方々の祈りが集まり、それが形とされたからなのです。誰一人として、宣教40年に無関係な人はいないのです。今集められている私たちはもちろん、かつて支えてくださった方々も、今は様々な事情で教会を遠ざかっておられる方々も、天に召された方々も、誰もが40年の歩みの中で、それぞれの時を支えて来られ

■牧師室より

現在、皆さんにアンケートをお願いしています。昨年第1回、そして3月には、第1回の回答結果を新たな質問事項として加えた、第2回アンケートをお願いいたしました。今回のアンケートは『デルファイ法』といって、回答者の意見を分類し、選択肢に取り入れていきます。それを皆さんに選んでいただき、評価をすることで、全体の意見としてまとめていく、ビジネスの世界で主に用いられる手法だそうです。定年教師の清重尚弘先生が友人の坂本雄三郎

たのです。

2023年の年を、宣教40年と位置づけ、感謝をもって歩みたいと思います。具体的な計画については、今後役員会を中心に、皆さんと共に検討してまいりたいと思っております。皆さんの恵みを受けて、建てられた教会ですから、自分たちの喜びにとどまらず、人々に恵みをもたらす機会となればと願っています。来年を宣教40年の年として、一緒に歩みましょう。

牧師のご著書に紹介されていた手法です。

役員会では、この手法を用い、皆さんの声を集めて、それを宣教40年の記念として、私たちの宣教計画に取り入れたいと考えています。

繰り返してのアンケートになりますが、こうすることで誰かが決めた、他人事の計画ではなく、皆で考えた、全員が当事者となる、計画が作り上げられることを願っています。教会とは誰か。それは主の名のもとに集う、皆さんです。今、皆さんの声を必要としています。ご協力をお願いいたします。(佐藤)